

3月22日 (日) 民数記 26章	「彼らのうち、ただエフネの子カレブとヌンの子ヨシュアを除いて、だれも生き残った者はなかった」(65節)。いよいよカナンの地に入らんとしていたイスラエル。そこには民数記 14 章で不信仰を厳しく問われた長老たちの姿はなかった。主の御言葉を「信じ、従いきる！」ことはなんと難しいことか。しかし、信じ切れないわたしのために、主は十字架に向かわれた。
23日 (月) 民数記 27章	「モーセは、主が命じられたとおりに、ヨシュアを選んで…立たせ、手を彼の上に置いて、主がモーセを通して命じられたとおりに、彼を職に任じた」(22－23節)。荒れ野の四十年、つぶやきの民を率いる大変な労苦を背負い続けたモーセの重荷が降ろされる時が近づいていた。「主が共に歩む」という約束と共に、その重荷が若きヨシュアに託されることになる。
24日 (火) 民数記 28章	「無傷の一歳の羊二匹を、日ごとの焼き尽くす献げ物として、毎日、朝夕に一匹ずつ、ささげなさい」(3－4節)。荒れ野の旅は、人々にとって自らの弱さを問われる歩みだった。だからこそ主は彼らを礼拝の恵みに招く。朝夕に献げ物を携えて主の前に立ち、感謝をもって一日を始め、感謝をもって一日を終える恵み。「共なる主の恵み」は礼拝を通して与えられる。
25日 (水) 民数記 29章	「第七の月の一日には聖なる集会を開く。いかなる仕事もしてはならない。角笛を吹き鳴らす日である」(1節)。第七の月は仮庵祭。角笛を聞きながら、荒れ野の旅の厳しさと自分たちの不信仰を想起し、昼は雲の柱、夜は火の柱をもって導いてくださった主の恵みを想起する。感謝と悔い改めを大切に覚える時、私たちは今日生きて働かれる神とつながられる。

26日 (木) 民数記 30章	「人が主に誓願を立てるか、物断ちの誓いをするならば、その言葉を破ってはならない。すべて口にしたとおり、実行しなければならない」(3節)。人の「誓願」はややもすると自分の願いで神を動かそうとする誘惑が伴う。それゆえ聖書は勇者エフタの誓願の悲劇(士師記 11 章)のように「誓願」の厳しさを示す。口で約束したことの重さを学ぶ者とさせてください。
27日 (金) 民数記 31章	「モーセと祭司エレアザルは、千人隊長と百人隊長から金を受け取り、臨在の幕屋に携えて行って、主の御前に。イスラエルの人々のための記念とした」(54節)。民が分け合う金の装飾品は、カナンの人々の命の代償が刻まれた品々だった。「クリスチャンはキリストを着る者」というとき、私たちはその恵みの背後にある尊い代償をどこまで自覚できているだろうか。
28日 (土) 民数記 32章	「子供たちのために町を建て、羊のために石囲いを作りなさい。しかし、あなたたちが口に出したことは実行しなさい」(24節)。ルベンとガドへの配慮と共に「口に出したことの実行」が求められた。約束したことを生涯を通して守り続ける責任の重さを想う。その時、私たちが誠実を示す前に主が大きな慈しみと誠実をあらわされた恵みを深く覚えことができるように。
29日 (日) 民数記 33章	「祭司アロンは、主の命令によってホル山に登り、そこで死んだ。イスラエルの人々がエジプトの国を出て第四十年の第五の月の一日であった」(38節)。一度は自分もモーセと同じように主のみ言葉を取り次ぐ者と主張したアロン。しかし主の戒めに従い、主から託された務めに仕えて祭司として死んだ。主の求めを真摯に聞き、主に仕える歩みを祈り求める。